

PAT-NO: JP362070686A

DOCUMENT-IDENTIFIER: JP **62070686** A

TITLE: MULTICYLINDER ROTARY COMPRESSOR

PUBN-DATE: April 1, 1987

INVENTOR-INFORMATION:

NAME

SAITO, JISUKE

KUBOTA, KOICHIRO

KIYOKAWA, YASUNORI

HARA, MASAYUKI

HAZAMA, MAKOTO

SASAKI, HIDETAKA

ASSIGNEE-INFORMATION:

NAME

SANYO ELECTRIC CO LTD

COUNTRY

N/A

APPL-NO: JP60209385

APPL-DATE: September 20, 1985

INT-CL (IPC): F04C023/00, F04C029/08

US-CL-CURRENT: 417/243, 417/428 , 417/440 , 418/60

ABSTRACT:

PURPOSE: To make it possible to exercise a capacity control of a multicylinder rotary compressor, by linking plural cylinders of the multicylinder rotary compressor through a valve device.

CONSTITUTION: In plural cylinders 42 and 43 of a muticylinder rotary compressor, rollers 46 and 47 are furnished, and a compressing operation is carried out respectively keeping a phase difference of 180° between the cylinders 42 and 43. In an intermediate partition plate 39 between the cylinders 42 and 43, a penetrating hole 63 is formed to link between the cylinders 42 and 43, and a valve device 64 is arranged on the way of the penetrating hole 63. Therefore, by opening the valve device 64, a bypass action of the inflicted pressure to the intake side between the both cylinders 42 and 43 is produced, and the capability of the whole compressor can be controlled to reduce.

COPYRIGHT: (C)1987,JPO&Japio

⑫ 公開特許公報(A)

昭62-70686

⑬ Int. Cl.⁴

識別記号

庁内整理番号

⑭ 公開 昭和62年(1987)4月1日

F 04 C 23/00
// F 04 C 29/088210-3H
F-8210-3H

審査請求 未請求 発明の数 1 (全6頁)

⑮ 発明の名称 多気筒回転圧縮機

⑯ 特 願 昭60-209385

⑰ 出 願 昭60(1985)9月20日

⑱ 発 明 者 齊 藤 治 助 群馬県邑楽郡大泉町大字坂田180番地 東京三洋電機株式会社内
⑱ 発 明 者 久 保 田 耕 一 郎 群馬県邑楽郡大泉町大字坂田180番地 東京三洋電機株式会社内
⑱ 発 明 者 清 川 保 則 群馬県邑楽郡大泉町大字坂田180番地 東京三洋電機株式会社内
⑲ 出 願 人 三 洋 電 機 株 式 会 社 守口市京阪本通2丁目18番地
⑲ 出 願 人 東 京 三 洋 電 機 株 式 会 社 群馬県邑楽郡大泉町大字坂田180番地
⑲ 代 理 人 弁 理 士 西 野 卓 嗣 外1名

最終頁に続く

明 細 書

1. 発明の名称 多気筒回転圧縮機

2. 特許請求の範囲

1. 回転軸の軸方向に中間仕切板を介して複数の円筒室を有するシリンダと、前記回転軸の偏心部で駆動されて円筒室の内周面に沿って回転するローラと、このローラの外周にばねで押圧されて各円筒室を高圧室および低圧室に区分するペーンとを備えた多気筒回転圧縮機において、円筒室を互いに連通させる通路と、この通路を開閉する弁装置とを設けたことを特徴とする多気筒回転圧縮機。

2. 通路を中間仕切板に設けたことを特徴とする特許請求の範囲の第1項に記載された多気筒回転圧縮機。

3. 弁装置を背圧で動作させることを特徴とする特許請求の範囲の第1項に記載された多気筒回転圧縮機。

4. 弁装置を電磁弁にしたことを特徴とする特許請求の範囲の第1項に記載された多気筒回転圧縮機。

縮機。

3. 発明の詳細な説明

(I) 産業上の利用分野

この発明は冷凍能力を制御する弁装置を備えた多気筒回転圧縮機の改良に関する。

(II) 従来の技術

従来の冷凍装置は例えば実公昭55-15009号公報に示されているように構成されている。ここで、この公報を参考に従来例を説明する。第14図において、(1)は回転圧縮機、(2)は凝縮器、(3)は減圧装置、(4)は蒸発器で、これらは順次配管接続されて冷凍サイクルを構成している。回転圧縮機(1)は回転圧縮要素(5)と、この圧縮要素を駆動する電動機(図示せず)とにより構成されている。回転圧縮要素(5)はシリンダ(6)と、回転軸(7)の偏心部(8)によってシリンダ(6)内を回転させられるローラ(9)と、このローラに接してシリンダ(6)内を低圧室(10)と高圧室(11)とに区分するペーン(12)と、このペーンの両側のシリンダ(6)に穿設された吸込孔(13)と吐出孔(14)とにより構成されている。吸込孔(13)は

蒸発器(4)の出口側に接続された吸込管(9)が接続されている。(9)は吐出孔(10)を介して高圧室(11)と連通する吐出室で、この吐出室はシリンダ(6)に形成されるとともに、内部に吐出孔(10)を開閉する吐出弁(12)が設けられている。吐出室(11)には凝縮器(2)に接続された吐出管(13)が連通するようにしている。吐出孔(10)に対向するシリンダ(6)壁には制御部(14)が設けられていて、これはシリンダ(6)壁に穿設されたこのシリンダ内に連通する案内孔(15)と、この案内孔を開閉する能力制御弁(16)を設けた制御室(17)とからなる。(17)は制御室(17)に連通した制御管で、この制御管は三方弁(18)を介して凝縮器(2)の出口側と、蒸発器(4)の出口側の吸込管(9)とに夫々切換えて連通するようにしている。

この構造の回転圧縮機では三方弁(18)の切換えによって凝縮器(2)の出口側の高圧冷媒か、蒸発器(4)の出口側の低圧冷媒を能力制御弁(16)に作用させ、この能力制御弁の開成あるいは開放によって回転圧縮機(1)の冷凍能力が調節されるようにしている。

㍑ 発明が解決しようとする問題点

この発明は複数の円筒室を通路で連通するとともに、通路にこの通路を開閉する弁装置を設けたことにより、弁装置を開放して各円筒室に流入した一部のガスを通路で一方の円筒室から他方の円筒室に逃して、多気筒回転圧縮機の冷凍能力の制御が簡単に行なわれるようにしたものである。

㍒ 実施例

以下この発明を第1図乃至第12図に示す実施例に基づいて説明する。

(1)は回転圧縮機、(2)は凝縮器、(3)は減圧装置、(4)は蒸発器で、これらは順次配管接続されて冷凍サイクルを構成している。回転圧縮機(1)は密閉容器(10)内の上部に電動要素(11)を、下部にこの電動要素の回転軸(12)により駆動される2個の回転圧縮要素(13)を夫々収納している。(14)は回転圧縮要素(13)を区画する中間仕切板である。回転圧縮要素(13)は回転軸(12)と同心の円筒室(15)を有するシリンダ(16)と、180°回転角をずらして回転軸(12)に取付けられた偏心部(17)と、この偏心部によって円筒室(15)の内周面に沿って回転するローラ(18)と

しかしながら、従来の回転圧縮機は三方弁(18)の切換えによって制御室(17)に低圧冷媒を作用させて能力制御弁(16)を開放し、吸込孔(9)からシリンダ(6)内に流入した冷媒の一部を制御室(17)から吸込管(9)に戻しているため、この制御室に戻動冷媒が流れ、振動や騒音が大きくなったり、あるいは冷媒を戻すための太いパイプが必要だったりする等の問題があった。

この発明は上記の問題を解決するために、回転軸の軸方向に中間仕切板を介して配置した複数の円筒室を互いに連通させる通路と、この通路を開閉する弁装置とで適宜連通させて、多気筒回転圧縮機の冷凍能力を制御できるようにすることを目的としたものである。

㍑ 問題点を解決するための手段

この発明は回転軸の軸方向に中間仕切板を介して配置した複数の円筒室を互いに通路で連通するとともに、通路にこの通路を開閉する弁装置を設けたものである。

㍒ 作用

と、シリンダ(16)に穿設された案内溝(19)と、この案内溝内を摺動しつつローラ(18)に接して円筒室(15)を低圧室(20)と高圧室(21)とに区分するベーン(22)と、このベーンの背面側に設けられたコイルバネ(23)と、シリンダ(16)の開口を閉塞する上軸受部(24)と下軸受部(25)とで構成されている。(20)は円筒室(15)の低圧室(20)に二股にわかれて開口する吸込孔である。(21)は円筒室(15)の高圧室(21)に開口する吐出孔である。(26)は中間仕切板(14)に穿設された貫通孔で、この貫通孔は吸込孔(20)から回転方向にやや離して上側のシリンダ(16)の円筒室(15)と下側のシリンダ(16)の円筒室(15)とを適宜連通するようにしている。(27)は貫通孔(26)を開閉する弁装置で、この弁装置は貫通孔(26)と直交する孔(28)内を摺動するブランジャ(29)と、このブランジャを押圧するスプリング(30)と、このスプリングを収納するバネ室(31)と、このバネ室と上側の円筒室(15)とを連通する連通孔(32)と、スプリング(30)の反対側でブランジャ(29)に冷媒圧力を作用させる制御室(33)とにより構成されている。この制御室にはキャピラリチ

ューブ等の細管で形成された制御管10が接続されている。12は制御管10に接続された三方弁で、この三方弁の一方は密閉容器40の上壁に取付けられた吐出管14に、他方は回転圧縮要素100の吸入孔102に取付けられた吸入管104に夫々接続されている。

このように構成された多気筒回転圧縮機において、吸入孔102から円筒室100に流入した冷媒はローラ106とペーン50との共働により圧縮されて吐出孔108から密閉容器40内に吐出される。そして、電動要素102を通して冷媒は吐出管14から凝縮器104に流入し、ここで凝縮液化される。この凝縮した液冷媒は減圧装置106で減圧され、蒸発器108で蒸発気化して吸入管104から回転圧縮機100に戻る。この運転状態で三方弁12が吐出管14側に連通していると、制御管10から制御室102に導びかれた高圧冷媒はプランジャ106に作用して、このプランジャによって中間仕切板108の貫通孔110を閉塞するようにしている。この貫通孔を閉塞することにより、吸入孔102から円筒室100に流入した冷媒はすべて圧縮されて吐出孔108から吐出されて全負荷運転

される。また、三方弁12が吸入管104側に連通していると、制御管10から制御室102に導びかれた低圧冷媒によりプランジャ106はスプリング108の押圧力で制御室102側に押されて貫通孔110を開放している。この貫通孔の開放により、吸入孔102から円筒室100に流入した冷媒はローラ106で貫通孔110を閉塞するまで、圧縮を遅らせ、このため、吐出孔108から吐出される冷媒量を少なくして冷凍能力の小さい制御運転を行なうようにしている。すなわち、冷媒を円筒室100で圧縮するローラ106は180°回転角をずらして回転しており、ペーン50の摺動位置を基準点として上側のローラ106が回転角0°の位置で圧縮行程に入ると、下側のローラ106が回転角180°の位置で圧縮行程と吸入行程とを行なうようにしている。そのため、貫通孔110は上側のシリンダ102の高圧室104と下側のシリンダ102の低圧室106とに開口し、高圧室104の冷媒を低圧室106に逃して上側の円筒室100で加圧される冷媒量を減らして低い能力の運転に入るようにしている。同様に上側のローラ106が回転角180°の位置で、下

側のローラ106が回転角0°の位置では下側のシリンダ102の高圧室104の冷媒が貫通孔110を介して上側のシリンダ102の低圧室106に逃げ、下側の回転圧縮要素100を低い能力の運転をするようにしている。

弁装置106で開閉される貫通孔110は上側の円筒室100と下側の円筒室100との冷媒を互いに他の円筒室100に逃して制御管10に冷媒が流れないようにしている。これにより、回転圧縮機100を低い能力にすると、制御管10が逃し冷媒の脈動によって振動しないようにしている。

パネ室106と上側の円筒室100とを連通する連通孔110は三方弁12を吐出管14側から吸入管104側に切換えたときに、プランジャ106がスプリング108の押圧力で移動しないような場合に円筒室100で圧縮された冷媒圧力をパネ室106に作用させてプランジャ106が制御室102側に移動して貫通孔110を開放するようにしている。

尚、上記説明においては、弁装置106を冷媒圧力で動作させるように説明したが、第13図に示すように弁装置を電磁弁106にしてもよく、この場合

には弁装置と冷凍サイクルとの配管接続が不要となり、制御装置の配管作業を省略できることは言うまでもない。

(H) 発明の効果

この発明の多気筒回転圧縮機は回転軸の軸方向に中間仕切板を介して配置した円筒室を互いに通路で連通するとともに、通路にこの通路を開閉する弁装置を設けたのであるから、容量制御時に弁装置を開放するだけで、回転圧縮要素の冷凍能力を制御できる。しかも、通路で軸方向に配置された円筒室の冷媒を互いに逃すようにしているので、冷媒を冷凍サイクルの外部に取出す必要がなく、脈動による配管の振動や騒音の発生を防止できる。

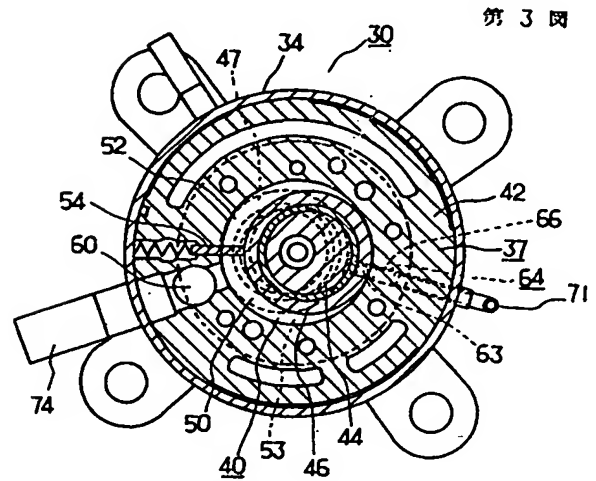
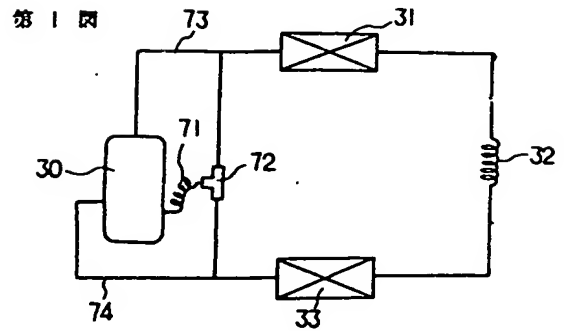
4. 図面の簡単な説明

第1図乃至第12図はこの発明を示し、第1図は冷凍サイクル図、第2図は2気筒回転圧縮機の縦断面図、第3図は第2図のIII—III線断面図、第4図は弁装置の要部拡大断面図、第5図～第12図はローリングピストン圧縮機の模式図であり、円筒室の内周面に沿ってローラがガスを圧縮する

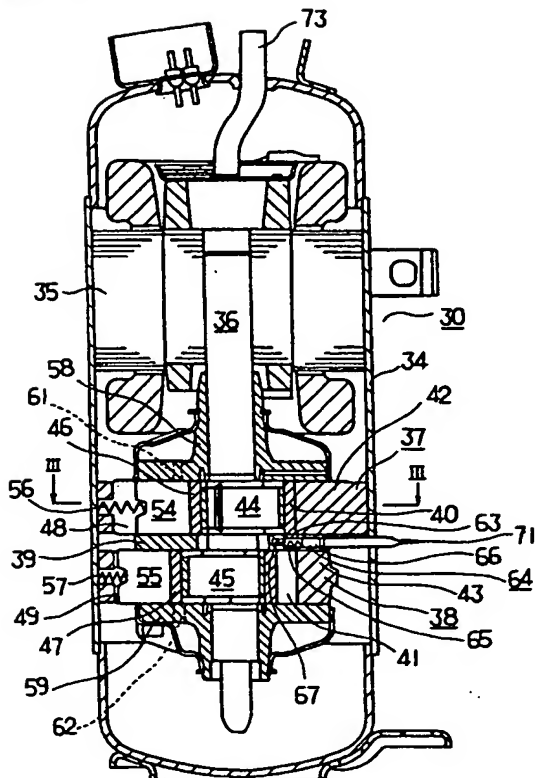
状態を説明する図、第13図は他の実施例を示す弁装置の要部拡大断面図、第14図は従来例を示す冷凍サイクル図である。

30…回転圧縮機、31…回転軸、32…中間仕切板、40(41)…円筒室、42(43)…シリンダ、44(45)…偏心部、46(47)…ローラ、50(51)…低圧室、52(53)…高圧室、54(55)…ベーン、56(57)…コイルベネ、58…貫通孔、59…弁装置。

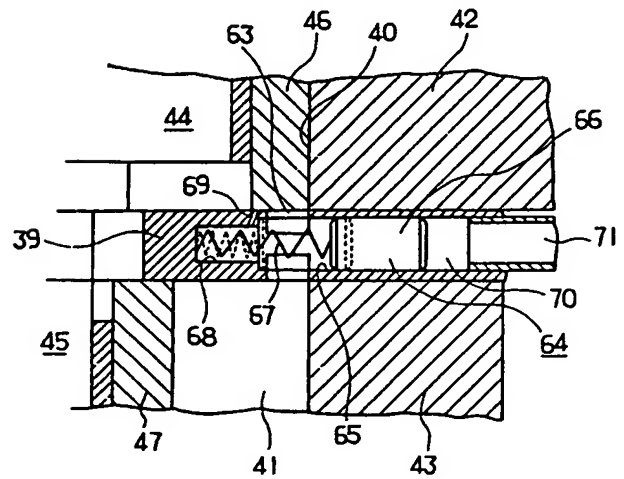
出願人 三洋電機株式会社 外1名
代理人 弁理士 佐野 静夫



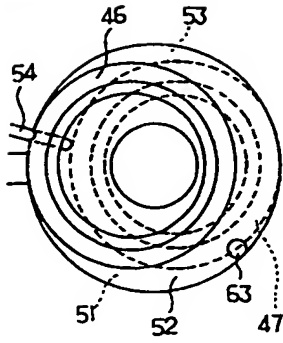
第2図



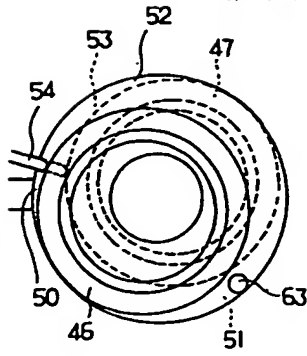
第4図



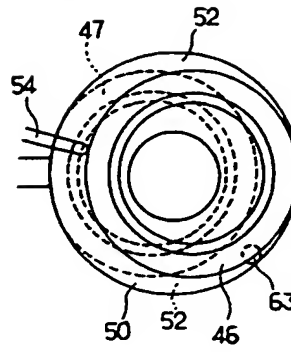
第 5 圖



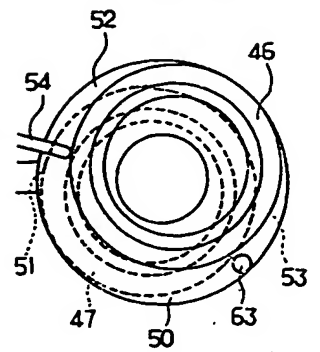
第 6 圖



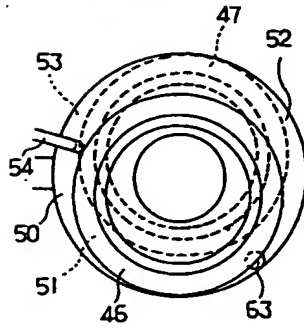
第 9 圖



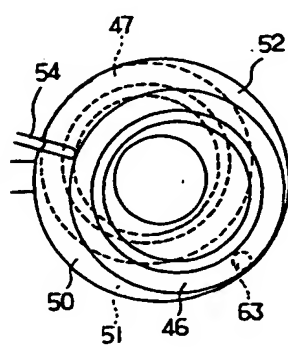
第 10 圖



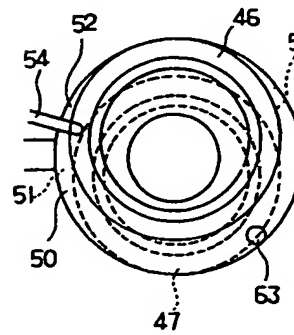
第 7 圖



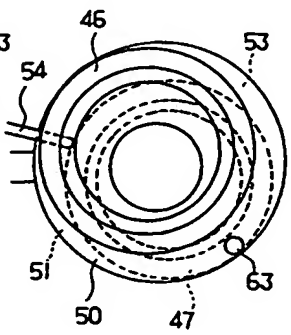
第 8 圖



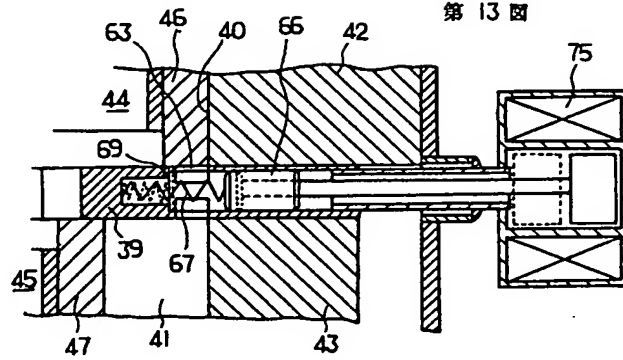
第 11 圖



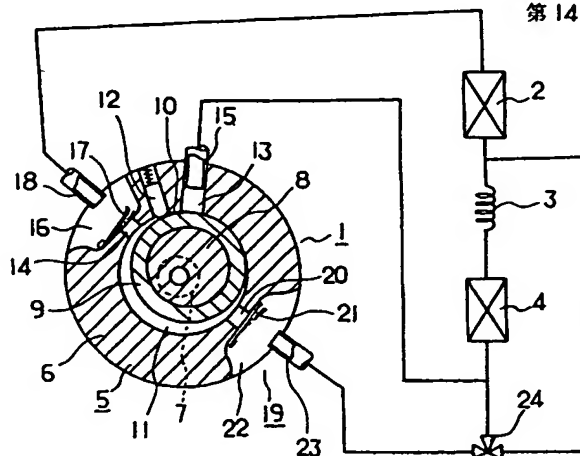
第 12 圖



第 13 圖



第 14 圖



第1頁の続き

⑦発明者	原	正之	群馬県邑楽郡大泉町大字坂田180番地	東京三洋電機株式会社内
⑦発明者	間	誠	群馬県邑楽郡大泉町大字坂田180番地	東京三洋電機株式会社内
⑦発明者	佐々木	英孝	群馬県邑楽郡大泉町大字坂田180番地	東京三洋電機株式会社内